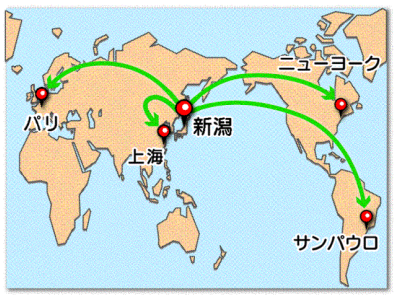
掲載日:2015年05月04日, 面名:解説, 記事ID:KIJ20150504_M000700100AQ08001
(C)新潟日報社

グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州（パリ）の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第１月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



第１月曜掲載

from パリ

今井　あいさん
＝新潟市中央区出身＝

新旧融合 音楽に刺激

花の都、芸術の都、音楽の都、愛の街、どんな形容詞も受け入れ、世界中の人々を魅了してやまないパリ。メトロ、街角、カフェ、バー、至る所で音楽に出合う。それは私たちの五感を刺激し、パリを忘れられない存在にする。

私がパリを初めて訪れたのは10年前。その後ニューヨークに移り住んだりしながらもやはりパリの魅惑に取り付かれ、戻ってきた。

歴史の情緒に満ちあふれるこの街も、現代をむさぼるように取り入れている。古きよきものを大切にしながらも、新しい刺激を追い求めて。変化はクラシック音楽の世界にも見ることができる。

オペラ座では10年以上前から演出の現代化を図っている。ドン・ジョバンニは会社社長に身を置き、スーツを着こなし、映画監督が舞台演出を手掛ける。舞台は光と闇を駆使するも暗闇が続くなど、ザ・オペラを期待する者にはいささか期待はずれの感もある。しかし古きよきものと新しさを融合させる試みは、新たなものを作り上げる重要なステップといえる。

シャトレー座ではクラシック中心のレパートリーを一新。数年前からミュージカルを中心に上演し、客層ががらりと変わった。

そんな中、パリの北にできたフィルハーモニー・ド・パリは、ジャン・ヌーヴェル設計の最新ホールだ。流れる雲をほうふつとさせる流線型の席。２４００人を収容、舞台を３６０度取り巻く。どの席に座っても音響のいいホールは十分な満足を観客に与える。

歌の場合は正面席でないとこもったように聞こえてしまうが、オーケストラなら背後の席は指揮者を見ることができ、彼らの緊迫感を共有できる。一番安い席は10ユーロ。老若男女足しげく通うファンができるのは間違いない。さらなる現代化へ役割を果たすだろう。

現代化を私自身も行っている。パリのそんなエスプリを届けるべく7月11日、26日にふるさと・新潟市のだいしホールにてリサイタルを行う。堪能していただきたい。

（今井さんはパリを拠点に活躍するソプラノ歌手です）

パリの最新ホール「フィルハーモニー・ド・パリ」

from ブラジル

小野塚　淑子さん
＝村上市出身＝

楽しむ読書 浸透願う

テレビゲームやインターネットが普及した現代、読書量が減っているのは世界共通の傾向かもしれません。ある機関の２０１２年の調査によると、ブラジル人の読書量も年々減少しているようです。これが３度目となったこの調査では、余暇に何をするかという質問に「テレビを見る」と答えた人が最も多く85％を占め、読書をすると答えたのは28％にすぎませんでした。

調査項目の中で興味深いのは、５～17歳の64％が「自分の意思ではなく勉学のため」または「学校で宿題として課されたため」などと、義務で読んでいると答えたことです。調査結果を受けて、専門家や出版社は国民に読書を促すためシンポジウムを開いたり、本を値下げしたり、コンビニなどに本を置いて手軽に買えるようにしたりするなど、あの手この手の努力を続けています。

しかし、国民の約18％が文字が読めないといわれているブラジルで、読書の習慣が浸透するにはよほどの時間と労力がいることでしょう。もし周りに読書を楽しむ大人がいなければ、子供たちはどうやってその面白さを知ることができるのでしょうか。実際、私の住む町の市立図書館を訪れてみると、冬休みにもかかわらず、人影はほとんど見られません。バスや地下鉄などでも読書している人を見たことはほとんどありません。３年前の調査の後、状況が改善されてはいないようです。

先の調査では、幼少期における先生や母親による影響が大きいという結果が出ています。「読書イコール義務」というイメージを払拭し、いかに子供たちに本の面白さを教えることができるかが、ブラジルの教育水準を上げる鍵になるのではないでしょうか。

本がこのままゲームや映像に取って代わられてしまうのだとしたら、あまりにも悲しすぎます。子を持つ親として、次の世代を担う子供たちが本を読むことの楽しさを失うことがないように願ってやみません。

（小野塚さんはサンパウロ近郊のサンジョゼ・ドス・カンポス在住です）

自宅近くの図書館。多くの蔵書があるが、利用者はまばら＝サンジョゼ・ドス・カンポス

from 上海

鷲津　史久さん
＝五泉市出身＝

中国の実像 目向けて

「爆買い」の次は「爆花見」と、中国人観光客を面白おかしく伝える日本の報道は、中国で生活していても日々インターネットなどで伝わり、残念に思えた。

上海へ赴任して3年目を迎え、赴任前に描いていた中国に対するイメージと実際が大きく違っていたことに気付く。自ら植え付けたこのイメージの元はと思い起こすと、教育でも経験でもない。多くの報道の中から自身の興味で抽出した偏見だったことに気付き、反省する必要を感じる。

赴任前は、尖閣諸島問題による反日デモ、鳥インフルエンザ、PM2・5など連日ネガティブな報道が続き、私を送り出す家族や同僚・仲間たちも哀れみの表情を隠せないようだった。

それも仕方のないことで、あのような報道を毎日見聞きしていれば、中国のイメージがステレオタイプに陥ってしまうことは避けられないと思う。

中国での日本についての報道はと言えば似たようなものだ。安倍晋三首相の発言に敏感に反応し、対日戦勝記念日には一日中当時の残虐映像を流し続けていた。

日中友好へ関係改善を求められる中、大きく報道される政治的意図を持つ記事だけでなく、民間レベルの心温まる小さな記事も気に留める大切さを感じてほしい。

最近よく目にするのは、中国版ツイッター「微博（ウェイボ）」に投稿される日本批判に対し、中国人が日本を擁護・賞賛するコメントだ。特に「80后・90后」と呼ばれる１９８０年代、90年代生まれの若い世代はインターネットを通じて日本への理解を深め、報道や教育とは違った日本観が芽生えているそうだ。

さまざまな誤解や偏見はあるが、13万人もの日本人がこの中国で比較的安心して生活できている。背景の一つが、日中国交正常化の道を開いた我が郷土の偉人・田中角栄氏の功績であることを忘れてはならない。きょう4日は角栄氏生誕の日でもある。

（鷲津さんは北越工業社員で上海の合弁会社に赴任中です）

晩年は日本租界地で日中文化交流も行っていた文豪・魯迅の故居

from NY

安岡　京子さん
＝南魚沼市出身＝

娘と学ぶ多文化社会

八海山の麓でおいしい雪解け水とコシヒカリを食べ、大自然の中で18歳まで過ごしました。妊娠８カ月の大きなおなかを抱えて駐在員の妻として１９９１年にＮＹに来ました。子供をさまざまな人種の住むグローバルな環境で育ててみたいと思っていましたが、日本語と英語の2カ国語教育は想像以上に大変でした。

平日は米国の学校、土曜は日本人学校、日曜は山のような日本人学校の宿題、それに塾まで。今考えればやらせ過ぎでした。親子でつまずいたり泣いたり、いろいろありました。

そんな苦労のかいもあり、今では、娘たちは食事中に「このゆずの風味良いね」などと言うこともあります。米国の日常生活ではあまり使わない「風味」といった日本らしい言葉だけでなく、文化的な感じ方や考え方の違いまで理解するようになってくれました。

私の住んでいる地域の義務教育は小学7年、中学2年、高校4年の計13年です。学校は非常にオープンで、先生への相談事やボランティアなど気軽に出掛けられます。子供たちの教育は親と先生、市の教育委員会が一つのチームとしてサポートしています。

米国ではいろいろなバックグラウンドを持った人たちが、それぞれの宗教、ものの考え方や価値観で暮らしています。このような環境の中では自分の考えや意見をしっかりと持ち、相手のことも尊重、理解する努力が必要です。自由、権利、自己責任を小さい頃から家庭や社会生活の中で学びます。

日本人を含めた少数民族にはハンディキャップもあり、子供の頃から一層の努力も必須です。大人の理解やサポートが必要で、学校には英語を母国語としない生徒のための専門の先生もいます。

国際化が一段と進み、米国では他のアジア系の人たちが急増しています。異文化を知ることは、自国の文化もあらためて考えることになり、それぞれの国の発展につながっていくと思います。

（安岡さんは旧六日町出身です）

安岡さんが住んでいる地域にある小学校